

前世で辛い思いをしたので、  
**神様が謝罪に**  
**来ました**

God came to apologize  
because I had a hard time  
in the past life



**初昔茶ノ介**

Chanosuke  
Hatsumukashi



## フレル

アルベルト公爵家の  
次期当主。  
有能なイケメンで、  
領民からの信望が  
厚い。

## キャロル

フレルの妻。活発な美人で、  
厳しくも優しくサキ達を  
見守る。可愛いものに  
目がない。

## アネット

フランの二つ下の妹。  
サキが大好き。  
背伸びしたがりで  
おしゃまな性格。

## フラン

アルベルト公爵家の子供。  
爽やかで優しいが、  
実はちょっと腹黒い  
ところも…?

## ネル

女神ナーティ様がくれた  
サキのお付きの猫。  
様々な魔法でサキを  
サポートする。  
ちなみに女の子。

## アニエ

魔法学園の生徒。  
学年一の魔法の実力者で、  
勝気なしっかり者。  
わけあってブルーム  
公爵家の養子に  
なった。

## サキ

不幸ばかりの前世を神様に  
謝罪され、幼女として  
異世界転生した。  
桁外れな才能を持つものの、  
コミュ障で人見知り。

★**Characters**★  
登場人物紹介

毎日、本当に嫌なことばかりだ……。

「おい、またこんなくだらないミスをしてるのか！」

部長の怒号がオフィス内に響いた。怒られるのは本日二度目だ。

私——あめみやさき雨宮咲は、部長のデスクの前で縮こまっていた。

「……す、すみま」

「ああ？ 何をボソボソ言っているんだ!？」

部長がバンとデスクを叩く。

ただでさえ話するのが苦手なのに、ますます小さな声になる。

「……す、すみません」

やっと口になると、部長がフンと鼻を鳴らす。

「まったく、一体いつになったらこんなミスをしなくなるのかね？ やる気がないなら辞めたらど

うだ」

「あ、あの……少し、寝不足で……」

昨日は同僚から仕事を押し付けられ、日付が変わる頃まで会社に残っていた。

それでも終わらず早朝に出勤したため、ほとんど寝ていない。

「言い訳は聞かんよ？ 生活習慣を整えることくらい、社会人なら当たり前だろう。寝不足だなんて、まさか毎晩男と遊んでいるのか？ ……いや、君みたいな容姿じゃ無理か」

部長が馬鹿にしきった様子で言う。周りの同僚からも、クスクスと嫌な笑い声が聞こえてくる。パワハラ、セクハラ、モラハラ……こんな扱いは日常茶飯事だ。

部長からの説教が終わり、ため息をつきながら席に戻る。

すると同僚の女性——加納<sup>かのう</sup>さんが話しかけてきた。彼女と仲の良い関田<sup>せきた</sup>さんをはじめ、他の女の子たちもニヤニヤとこちらを窺っている。

「ねー、雨宮さん。ちょっと今日用事があつてさー。私たちの仕事もやってくれない？」

「え……」

でも、昨日だって……。そう思うけど、口に出せない。

私と違って自信たっぷり、華やかな彼女たちを前にすると、引け目を感じてしまう。

「お願い！ どうしても外せない用事があるの！ 雨宮さんならやってくれるよね？」

「……わ、わかった」

「ほんと？ ありがとう！ 雨宮さんみたいな人がいて助かるわー」

デスクに分厚いファイルが何冊も積まれる……。これはまた残業かな、残業代なんて出ないのに。

——私の人生は、こんなことばかりだ。

小さな頃から、酒癖の悪い親に虐待<sup>ごうたい</sup>されてきた。

小学校から高校までは、クラスメイトにイジメられた。原因は親の暴力でできた身体<sup>あぶ</sup>の痣だ。

地元を離れば何か変わるかもと思い、実家を出て、自分で学費を稼いで大学に進学した。

けど、結局周りから避けられた。ようやくできた彼氏も、私の痣を気味悪がって、別れを切り出してきた……。それ以来、自分の外見に自信がなくなった。

就職しても、扱いが変わることはなかった。

こんな人生、終わらせたほうがいいのかな……。

何度も考えるくらい辛かったけど、結局怖くてできなかった。

そして今日も、同僚にこき使われている。

自分の業務さえこなしきれないブラック企業だというのに、こんな仕打ちをされたら深夜まで残業になる。

私に仕事を押しつけることに成功した同僚たちは、今夜会う男性たちの話題で盛り上がっていた。きつと今日もデートや合コンへ向かうのだろう。

はあ……嫌になる。今日中に終わるかな？

私はみじめな気持ちになりながらも、仕事にとりかかった。

ようやく片づいたところで時計を見ると、午前零時を過ぎていた。

またこんな時間だ。終電に間に合うかな……。

本当は会社の制服を着替えたいところだけど、そんな暇なさそうだ……。

帰ろうとして会社を出ると、突然大雨が降りだした。

……最悪。

私は鞍を頭に載せ、駅までダッシュすることにした。  
ヒールとはいえ、十分か十五分で着けるはずだ。

びしょ濡れになりながらも走っていると、ようやく駅が見えてくる。

その瞬間だった。

光が私を包み、全身に激しい痛みが走る。同時にすさまじい音が目をつんざいた。

何が起こったのか理解できないまま、気づくと地面に倒れていた。

え……何……？

薄れていく意識の中で、周りの声が聞こえてくる。

「おい！ そこに雷が落ちたぞ！」

かみ……なり？ まさか、私に……当たっ……た？

私、雷で感電して……死ぬの……？

何、その人生——バカみたい。

神様は、私にひどい人生を与えたもんだね。

せめて少しくらい、楽しいことがある人生を送りたかった。神様に文句の一つも言いたくなる。  
でも、そうか……これで、終わっちゃったんだ——

「いやあ、ほんととそれなー、これで終わりとかないありえない!? って思うよねー」

と、思ったのに……なんか、軽そうな口調の声が聞こえてきた。

……私は死んだんじゃないの？ というか、なんで私が考えていることがわかるの？

しかも文句に相槌を入れてくるなんて、まさか——本当に神様？

でも、こんな適当な話し方する神様がいていいわけ!?

「そんなこと言われると耳が痛いなあ。まあ、とりあえず目を覚ましなよ」

私はゆっくり目を開け、立ち上がった。

「何、ここ？」

なぜか身体の痛みが消えている。辺りは何も無い、真っ白な空間だ。

そして目の前には——見るからにチャラそうな男の人が立っていた。

明るいミントグリーンの髪の毛は、ワックスで整えたような無造作ヘアだ。服装はダボツとしたパーカーにスキニージーンズ、ごついスニーカー。

喋り方といい、外見といい……パリピっぽい。

「やあ、雨宮咲さん」

気安い感じで話しかけられて、後ずさる。

「……あ、あの……お会いしたこと、ないと思うんですが……」

おかしい。私はこの人に見覚えがない。でも、この人は私のことを知っているみたい。ただでさえチャラそうなのに、怪しすぎる……。私は思わず身構えた。

「そんなに警戒しないで。服とかもこの世界に合わせるんだし、怖くないっしょ!? ボクはこの世界を担当してる神の一人、ラスダっていうんだ」

神様……本当に神様? こんな人が!? 変な髪色の、パリピな大学生にしか見えないけど……。疑いの目でじろじろ見てしまふ。だけど、神様は気にした様子もなく続ける。

「いやー、実は咲さんが落雷で死んじゃったのって、ボクの手違いなんだよね」  
「て、手違い?」

「そ、実は世界を管理するために、定期的に試練みたいなものを与えてるんだ。そうしないと、世界のバランスが悪くなるんだよね」。キミのいた世界でいえば、台風とかの自然現象かな。今回は雷を落としたんだけど、たまたまというか、やつぱりというか、その位置にキミがいてさー」

何? じゃあ、私が死んだのは神様のせいだったの!? というか、「やつぱり」って何?

何がなんだかわからないでいると、神様がパンツと手を合わせて頭を下げてきた。

「いやー、マジでごめん」

か、軽いな!? 神様からすれば私一人の命なんてどうでもいいんでしょうけど!

そんな心のツツコミに<sup>こた</sup>応えるように、声が響く。

「ラスダ! あなた、その態度はなんなの!」

ふいに女の人が現れた。女の人は、神様——もう呼び捨てでいいや、ラスダの頭を後ろから思いつきりひっぱっていた。

突然の登場にびつくりしたけど、よく見るとすごくきれいな女性だ。

ラスダと同じ明るいミントグリーンの長い髪に、透き通るような水色の瞳——まるで教会で目にする聖母様みたいに神々しい姿をしている。

「いつて! 何すんだよ姉貴!」

ラスダが頭を押さえる。姉貴ってことはつまり、ラスダのお姉さん? この人も神様なのかな。むすっとしたラスダを、女神様らしき人が叱りつける。

「これはあなたの責任なのよ!? 神は全ての人に平等、それをあなたは——」  
二人が揉め始めた。

一体どういうこと……? 当事者の私には、全然わかってないんだけど……。

そもそも、全ての人に平等なんて……そんなわけない。

ラスダは世界を管理しているとか言ってたけど、私の人生は苦しいことばかりだった。みんなが私みたいに、苦しみばかり受けているわけがない……。

すると、女神様が気の毒そうな様子で言う。

「そうなのです。咲さん」

この人も、私の考えていることがわかるみたいだ。



それよりも、さつきから「やっぱり」とか、「そうなのです」って……、どういうこと？

事情が呑み込めないでいると、女神様が話し始める。

「私はこの世界を担当しているもう一人の神、ナーティといいます。この世界で生まれる人が皆、平等に幸福を手に行けるよう管理していました。しかし、私の愚弟——このラスダが職務をサボりました。その時に生まれてしまったのがあなたなのです」

「えっと……つまり？」

ナーティ様は口ごもる。そのあと、重苦しい表情で告げた。

「申し訳ありません。手違いにより、あなたに幸福は一切存在しなかったのです」

私は言葉を失った。

なんだ、それ……。私、神様のせいで不幸になるよう生まれたってこと……？

もう死んでいるんだから関係ないかもしれない。でも、たとえ謝罪されたって、わざわざ神様からそんな事実を聞きたくないかった。

シヨックのあまり、呆然としてしまう。

辛い人生が当たり前で、もう泣くことなんて忘れたと思ってたのに……涙が出てきた。

ナーティ様は気の毒そうに言う。

「本当に申し訳ございませんでした……。生きている間、あなたがどのように生活していたのかはわかっています。どれだけ苦しく、辛い思いをしてきたのか……。そこで、私からの提案です」

「提案……？」

「私たちが管理している世界は他にもあります。その世界で、もう一度人生をやり直していただきたいのです。咲さんが幸福になるよう、この愚弟に代わって私があなたを再構築します。いかがでしょうか？」

今まで散々ひどい目に遭ってきたのに、そんな話、信じられるわけない……。

でも、辛い人生だったからこそ、一度でもいい、幸せになってみたい気持ちもあった。

悩んだ末に……口にする。

「そこでは、幸せになれますか……？」

「はい。あなたがこの世界で苦しんだ分、多くの幸福がもたらされることを、神の名のもとにお約束いたします」

「でも……」

私なんかが本当に幸せになれるのかな……やっぱり信じられない。

そう思って俯いていたら、ナーティ様に抱き寄せられる。

「咲さん、あなたはこれから幸せになれるのです。幸せになるのは、人としての当然の権利です。望む形で、好きに生きていいんですよ」

あったかい……。人に抱きしめられるって、こんな感じなんだ。

親にさえ、こんな風に優しくされたことなかった……。

ナーティ様から、あたたかさが伝わってくる。その温もりで、次第に私の目頭が熱くなる。

私のことを助けようと……幸せになれるって言ってくれて……。

何もかも、初めての出来事だ。私の目からはたくさんさんの涙が溢れた。

今まで知らなかった。嬉しさでも、泣いちゃうことってあるんだね。

「よろしく……お願いします……」

ひとしきり泣いた後、ナーティ様が優しく聞いてくれる。

「では次の世界での幸福のために、何か希望はありますか？」

「……えっと、せっかくやり直すなら、できれば若くしてもらって、最初は森なんかで読書とかしながらのんびりしたいです……。それと……少し、可愛い子になりたい……かな？」

人と接するのは苦手だ。今まで利用されるか、怒られるかのどちらかだった。

だからしばらくは誰にも会わず、一人でのんびりしたい。

それに今より少しでも見た目がよければ、トラブルが減るかもしれないし……。

「わかりました。では、この子をあなたに」

ナーティ様が両手を広げると、その間に小さな子猫が現れた。

子猫は真つ白で、ふかふかな毛並みをしている。動物は飼ったことないけど、テレビで見た優雅なもふもふの猫ちゃん——ペルシャ猫に似ているかも。

「この子はあなたのために作りました。あなたに尽くし、命令に従います。そして、【ブック】の魔法が使えます」

「ブック？」

「はい。今から行く世界には、魔法があるのです。ブックと声をかけてもらえれば、この子は本に変身します。色々な本に変わるので、新しい世界での物語や歴史書、なんでも好きな本を読めますよ。加えて、咲さんが知りたいことを尋ねれば、本の上で文字にして答えてくれます」

そう言いながら、ナーティ様は子猫を私に抱っこさせた。

ふわふわして、あったかい……私は笑顔になった。

「ちなみに、魔法についても咲さんに不利益がないよう考慮するのでご安心ください」

「何から何まで……すみません……」

「いえ、当然のことです。それだけの苦しみを、あなたは受けていたのですから……。では、そろそろ転生させます。最後に、何か気になることはありませんか？」

「不安がないって言ったら、嘘になりますけど……困った時は、この子を頼ります。ナーティ様、ありがとうございます。私……これから幸せになります」

「お礼などいいのです。全てはこの愚弟のせいなのですから」

ナーティ様がもう一度ラスダを力強くひっぱりたい。

「痛っ！」



「あなたも、少しははじめに謝ったらどうですか！」

「……ご、ごめんなさい。次の世界では幸福になつてよね。ボクも祈ってるからさ！」  
……まだチャラいけど、ラスダはいちおう頭を下げてくれた。

「では、あなたに幸福があらんことを。これからは望むままに、自由に生きてください」  
「……はい」

私は白い光に包まれ、眩しさに目を閉じた。

そして次に目を開けると——知らない森に立っていた。

## 1 異世界生活の第一歩

光が顔に当たり、眩しさに目の上に手をかざす。

辺りを見回すと、私はたくさんのお木々に囲まれて立っていた。

緑に溢れ、木漏れ日が降り注ぐきれいなところだ。

「ほんとに、森にいる……」

眩いて気づいた。なんだか、声が高い……というより、幼い感じがする。

側に川が流れていたで、近づいてみる。覗き込むと、見覚えのない顔が映っていた。



「これが、私!？」

見た感じ、年齢は五歳くらいかな？

肩くらいの長さの、キラキラ輝く銀の髪……それに、幼いけど整った顔。ちょっとたれ目でのんびりしてそうな——自分の顔だからこんなことを考えるのは恥ずかしいけど、庭で微笑みながら紅茶を飲んでるお嬢様ってとこかな？

少し可愛くとはリクエストしたけど……少しどころか、ものすごく可愛い顔になっている。

なんだか照れるけど、こんな可愛い女の子になったのは嬉しい。今の服装は白いワンピースだけど、こんなに可愛くなれたなら、色んな服を着てみたいかも……。

でも、ちょっと若くしすぎじゃないかな？

まだ見慣れない顔を両手でムムム二していると、鳴き声が聞こえた。

「じゃあ」

そっちを見ると、ナーティ様に渡された猫ちゃんが座っていた。

ふさふさの尻尾をぱたん、ぱたと左右に動かしている。

「あ、ごめんなさい。あなたのことを忘れてたね」

私が抱っこすると、まったくですと言わんばかりに「なう」と鳴く。

か、かわいいよね。この猫ちゃんをもらえたことも、かなり幸せ……。

「そういうば、本になれるのよね？ 確か……ブック!」

ナーティ様の言っていたように、子猫に声をかけてみると、空中に浮かび、本に変身した。

「おおー! 猫が変身するなんて、魔法の世界って感じ!」

私は初めて見た魔法に感動しながら、その本——もとい、本になった子猫を手にとった。

大きさは雑誌くらい。ページをめくってみると、全てが白紙だった。

「あ、そっか……」

ナーティ様が、知りたいことを文字にして教えてくれるって言っていたよね。

「何か聞いたらページに出てくるのかな。えっと……。猫さん、この世界のことを教えて?」

なんだか、スマートスピーカーみたい……。

そんなことを考えていると、ページにじわじわと文字が現れた。

《ここは魔法の世界、シャルズ。この世界では誰もが魔力を持ち、魔法の技能が全て。魔法に優れた人たちが、王族や貴族として国を治めています》

魔法に、王様や貴族かぁ……。元の世界では考えられないね。

そんな世界に転生したことは、この猫さんだけじゃなく、私にも魔法が使えるのかな？

幸福になるように再構築するって言われたけど……特に今までと違う感じはしない。

ともかく、この子の使い方はわかった。

「あなた、名前は?」

またページの上にじわじわと文字が浮かぶ。

《女神ナーティ様より、ネルの名を賜りました》<sup>たまわ</sup>

「ネルっていうのね。じゃあ、ネル。この近くに落ち着ける場所はある？」

《ここからまっすぐ進んだところに、居住に適した洞窟<sup>どうくつ</sup>があります》

ナビ機能もあるなんて、高性能……。

「洞窟ね。わかった、もう猫に戻っていいよ」

私が言うと、ネルは本からふわふわの子猫の姿に戻った。

五歳ぐらいの私としては、両手で抱えるところどいいういサイズだ。ネルを抱っこしたまま、洞窟を目指して歩き始める。

五分ほど進むと、目的の洞窟に着いた。

確かに、入り口が木々に覆われていて、ここならゆっくりできそうかも！

「うん……いったんここにしようかな」

私は中に入ると、目についた大きな石に腰かけた。

さて……これからどうしよう？

ネルと一緒に、しばらくまったりと読書生活を楽しむつもりだけ……そういえば、森で暮らしなことなんてない。

まずは、お家を作る？ でも、家を作るのって、地面をならして、基礎を作って、木を切って……って、考えるだけで大変そう。

幸せな引きこもりライフを送るつもりだったのに、早くも不安になってしまった。

いやいや、でも慌てない。私にはネルがいるもん。

「ブック！ ネル、私、これからどうしたらいいかな？」

《食糧と住環境の確保が最優先事項であると推察します。そのためにはまず、魔法の習得が必要となります》

「魔法の習得……」

そっか、私も魔法を覚えられるんだ。

魔法……想像したらわくわくしてきた。

ナーティ様は私が幸せになれるように考慮してくれるって言ってたし、もしかしたら他の人は使えないような、すごい魔法を使えるようになっていたりして！

《……サキ様》

「はっ……」

何も聞いてないのに、ページの上にツツコミが浮かんではいる……。

は、恥ずかしい。つい妄想にふけてしまった。

浮かれている場合じゃないね。今はお家も、布団も、ごはんもない。

まじめに魔法を覚えなきゃ、私は幸せどころか、ここで骨になっちゃうよ！

「じゃあ……まずは魔法を覚えよう。ネル、魔法について教えてくれる？」

《魔法とは魔力を用いた能力全般を指します。魔力には属性があり、生まれ持った属性の魔法しか行使<sup>こうし</sup>することはできません》

「ふーん、どんな属性があるの？ あと、私の属性も知りたいな」

《属性は炎<sup>フレイア</sup>、水<sup>アクア</sup>、風<sup>ウィンド</sup>、雷<sup>エレクト</sup>、土<sup>グラッド</sup>、草<sup>ワイルド</sup>、光<sup>ライト</sup>、闇<sup>ダクネス</sup>、空間<sup>ディジョン</sup>、治癒<sup>ヒール</sup>、特殊<sup>ユニーク</sup>の十一種類があります。サキ様の属性は全てです》

「全て……って、全部ってこと!？」

さらつと言われたけど、ものすごいことのような……。

「それって、普通のことなの？」

《普通ではありません。生まれ持つ魔法の属性は、平均で三つほどです。サキ様に自由に魔法を覚えてもらいたいという、女神ナーティ様のご配慮です》

「そうなんだ……」

ナーティ様、ありがとう。

心の中で呟くと、ページをめくってネルの解説を読み進める。

《魔法には、十段階の威力のランクが存在します。これに該当する魔法は【ナンバーズ】といい、この世界の魔法の基本となっています。一番下のランクで、生活で役立つ程度の威力のものを【第二<sup>シグル</sup>】と呼びます。その他、ナンバーズに特性を付与する【ワーズ】、属性を付与する【エンチャント】、ナンバーズ以外の【オリジナル】と呼ばれる魔法も存在します》

うわあ……急にいっぱい文字が出てきた。

「え、えっと……。とりあえず、ナンバーズの第一<sup>シグル</sup>ランクから魔法を覚えていけばいいのね？」

《はい。さっそく使ってみましょう》

「え？ 急に言われても……」

いくら魔法の世界でも、そんなに簡単に使えるものなの？

戸惑う私にはおかまいなしで、本に文字が浮かぶ。

《まずは右手で私に触れてください》

促されるまま、白紙のページに手を置いてみた。

あれ……、少しあったかい……。

というか、あったかい何かが、ページから流れ込んでくるみたい。

《今、触れている部分から熱を感じると思えます。これが魔力です。魔力はサキ様の身体にも流れています。目を閉じて集中すれば、感じ取れるはずです》

「や、やってみる」

ネルの指示通りに目をつむって、身体の中に意識を向ける。

すると、今まで感じたことのないエネルギーを見つけた。

「ネル、これのこと？」

目を開くと、本に文章の続きが浮かんだ。

《では、その魔力を手に集めて》

さっきのあったかいエネルギーを手に移動させる……そうイメージしてみると、右手がだんだん熱くなってきた。不思議な感覚……私は目の高さにかざす。

《その熱を炎に変えるイメージで、【フレア】と唱えてください》

「……フレア！」

右手の先に赤い魔法陣が浮かぶ。そこから拳くらいの炎がぼんつと飛び出して、すぐ消えた。

「で、できたー!!」

一瞬だったけど、これが魔法だよね!? 本当に私にも使えるんだ、すごい!

《おめでとうございます。魔法スキル【第二フレア】<sup>シッ</sup>を習得しました》

「ス、スキル?」

はしゃいでいたら、また知らない言葉が出てきた。

《スキルとは、経験から獲得する技能のことです。魔法スキルの他、武術スキル、常態スキルが存在します。常態スキルのみ、無意識かつ恒常的に発動することができます》

うう、また文字がいっぱい……。

「魔法と魔法スキルって、なんか違うの?」

《魔法は魔力・媒体・イメージの三つが揃えば発動可能であり、スキル化は必須ではありません。

ですが魔法スキルとして習得することで、通常より発動の速度が速くなり、消費魔力は半分以上に

なります。ただし、第二フレアのようにナンバーズとしてスキル化するためには、発動の経験を重ね、常に一定の威力にコントロールする技量が必要になります》

「え?」

思わず首を傾げる。スキル化って、思ったよりずっと大変なことみたい。

「でも、おかしくない? 私は一回やっただけでスキルになったよ?」

《それは、サキ様の常態スキルのおかげです》

「常態スキル……?」

ますますわけがわからない。

「ネル、スキルって経験を積んで覚えるんでしょ? 私、この世界に来て一時間も経ってないし、

常態スキルなんて持ってないよ」

《生前のご経験により、サキ様には現時点で常態スキルが存在します。加えてナーティ様の恩恵により、サキ様のための特別なスキルも獲得されています。サキ様の常態スキルを表示しますか?》

「じゃあ、お願い」

半信半疑で見せてもらうと、とんでもない内容が示されていた。

「何……これ?」

自分では全然わからなかったのに、何個もある。しかも、すごそうな内容のものばかりだ。

【精神耐性】<sup>たいてい</sup>100%、【物理耐性】50%……!?」

《耐性は精神・肉体にダメージを継続的に受けると獲得される常態スキルです。ダメージを受けた時間や量により、カット率が上昇します》

それじゃあ、これは私が前世で受けた虐待やイジメ、あと、社畜生活の成果？

こんなことでも役に立つのか、異世界って。痣や心の傷は前世では辛いだけだったけど、今度は私の役に立つ力に変わってくれたみたいだね。

「あとは、【習得の心得】？」

《習得の心得は、スキル化を強力に補助する常態スキルです。これがナーティ様の恩恵であり、先ほど第一フレアを獲得できた理由です。通常、スキル化には膨大な経験が必要となります。ですがサキ様は、一度技の発動に成功する、もしくは他者から教えられて概念を理解するだけで、スキルが獲得できます》

要するに、私は人より簡単にスキルを手に入れられるってことだよな？

何それ、すごい！ ナーティ様ありがとう！

「それに、【変質の才】？」

《変質の才は、習得したスキルに改良を加え、別のスキルを生み出す常態スキルです。こちらも、ナーティ様の恩恵です》

ただでさえ簡単にスキルをゲットできるのに、さらに自分でもどんどんスキルを作れちゃうってこと？ ナーティ様、私をひいきしすぎじゃないかな？

「すぐすぎて、使いこなせるか自信なくなってきた……。で、でもとにかく、どんどんスキルを習得しなさいってことだよな？ よーし、まずはナンバースを覚えていくぞお！」

こうしてネルの指導のもと、魔法の練習に取りかかった。

私は一度集中しちゃうと、他のものに目が行かなくなる。

全属性の第一ランクを習得したところで、日が暮れかけていることに気がついた。

お腹の虫がぐうと鳴く。

「うう……」

そういえば、こっちの世界に来てから何も食べてない。

スーパ―なんてあるわけないし。食べ物……どうしよう。

「ネル、この近くに食べられるものってないかな……？」

《この洞窟から三分ほどの場所にアポルの木があります。サキ様の世界でいう、りんごのような果実を実らせませす》

「よ、よかった……じゃあ採ってこようかな。ネル、猫に戻って案内してくれる？」

私は子猫姿のネルを抱っこして、洞窟を出た。

方向を間違えると、ネルが鳴いて教えてくれる。

本当にネルがいてくれてよかった……。まだよくわからないこの世界だけど、おかげで心細くない。

ネルの教えてくれた通り、三分ほどでつやつやした赤い実がたくさんった木を見つけた。これがアポルだよね？

「美味しそう！」

側に駆け寄って手を伸ばす。けど……五歳の身長では、一番低い枝にも手が届かない。

「ど、どうしよう……えいっ！」

私は落ちている枝を拾って、精一杯背伸びしながら振り回す。だけど葉っぱを掠めるだけで、なんの役にも立たない。

しばらく奮闘していると、ネルが「なあゝん」と鳴いた。

「はっ……」

振り向くと、ちょこんと座ったネルが残念そうな顔でこっちを見ている。

今は猫だけど、なんとなくわかる。

この感じ、『サキ様……』と呆れながらツツコミを入られている気がする。

「……そうよ！ こういう時のための魔法！」

実感がわいてなかったけど、私は今、魔法が使えるんだった！ よし、練習の成果を試すぞ！

アポルの木に手を向け、唱える。

「第一ウィンド！」

風の刃が木に飛んでいく。かまいたちのように枝を切断し、アポルの実を三つほど落とした。

「やったー!! できたよ、ネル！」

ネルも満足げ頷いて、「にゃあん」と鳴いてくれた。

私はネルを頭に寄せ、収穫したアポルの実を抱えて洞窟に戻った。そのうち本格的に暗くなってきたので、その辺で小枝を拾い、洞窟の中で焚火をした。おかげで夜になっても明るいし、結構あったかい。

ぱちぱちと燃える焚火の前で、アポルをかじる。味もりんごそのもので、甘酸っぱくて美味しい。ネルも食べる？ って聞いたけど、首を横に振られた。魔法の猫だから、ナーティ様から魔力の供給を受けていて、お腹は減らないんだって。

満腹になったところで、今後のことを考えてみる。

ネルでアニマルセラピーできたおかげか、魔法を使えた達成感のおかげか……どん底だった心が少し元気になった。

でも、人に会うのはまだ怖い。コミュ障だし、人見知りだし……。

ナーティ様にリクエストした通り、しばらくこのままのんびり森で暮らしたいな。

今日はネルに色々なことを教えてもらっただけだったけど、ブックを使えばこの世界——シャルズの本なんかも読めるんだよね。

朝からのんびり読書して、ネルと魔法の練習をして、夜はきれいな星を眺めながらゆっくり眠りにつく……。はあ、考えただけでなんて素敵で悠々自適な生活なの……。



そういえば、前の世界で子供だった頃は、楽しいことなんてなかったな。親におもちゃを買ってもらったこともないし、お小遣いもない。おかげで、友達から仲間外れにされていた。

気晴らしといえば、学校の図書室で借りた本を読むことくらい……それさえも、お手伝いと称して家事をほとんど押しつけられ、読みきれないことも多かった。

でも……私はもう自由なのだ。酒を飲み暴力を振るう親も、私をいじめる同級生も、嫌がらせしてくる同僚や部長もいない。

好きな時に起きて、やりたいことができるのだ……なんて幸せなんだろう！

私はシャルズにやって来た喜びをかみしめつつ、この森で生活しようかと決心した。

——こうして私が森で生活を始めて、早くも三ヶ月が過ぎようとしていた。転生したての時は、森でのサバイバル生活がちよつと心配だった。

けど、ネルがなんでも教えてくれるおかげで、不自由なく暮らせている。

土属性の魔法で家具が生み出せるとわかり、机や椅子やベッドを作った。洞窟をさらに拡張してリビングや寝室に部屋分けし、トイレやお風呂も設置してある。

「今日のごはんは何かいいかなー」

鼻歌を歌いながらドアを開ける。ドアの向こうは日当たりのいい庭みたいな感じだ。

洞窟の天井の一部に穴を開けたこのスペースでは、果物や野菜を育てている。

これは草属性の魔法を覚えたおかげだ。茶葉を育て、紅茶を作ることにも成功した。

初めの一週間くらいは森の果物を食べていた。最近は狩りに挑戦していて、お肉を食べることもある。動物の解体ができるか心配だったけど、精神耐性100%のおかげか、比較的楽にこなすことができた。

家も食べ物も充実して、森の生活はさらに理想的なものになっている。

ちなみに今着ているお洋服は、ナーティ様特製だ。だから自動洗浄されて、伸縮自在なんだって。ネルのブックのおかげで、シャルズの文化や歴史の本も読めている。毎日の読書で、文字や社会のことを勉強した。世界を救った勇者と賢者の物語の本なんかも面白かったな。

退屈もしないし、寂しくない。ずっと森で暮らしてもいいかもと考えてくる。

「にゃーん」

「あ、もうそんな時間？　じゃあ出かけようか」

ネルに促され、私はある場所へ向かう準備をする。

ちなみに洞窟の入り口には土属性魔法で扉を作っており、鍵をかけてから出発する。もう洞窟というより、立派なお家だね。

しばらく森を進むと、開けた草地に二匹の熊の姿が見える。

一匹は二メートルくらいある大人の熊、もう一匹はまだ子熊だ。

「クマノさん、クマタロウくん！　お待たせ！」

二匹は顔を上げ、私のところへ駆け寄ると、頬を舐める。

実は二ヶ月ほど前、この熊の親子が狼に襲われているのを助け、懐かれたのだ。それ以来、ずっと仲良くしている。

すごく嬉しかった。異世界で、ううん……今までで、初めてできた友達だ。

ネルはもちろん大切だけど、ナーティ様が私のために与えてくれた存在だ。自分から仲良くなれた友達には、クマノさんたちが初めてになる。

ちなみに、大人の熊がクマノさん（私命名）、小熊がクマタロウくん（私命名）。

「クマノさん、元気だった？ クマタロウくん、また大きくなった？」

私がそう言うと、二匹は軽くのどを鳴らして首を傾げる。

キラキラしたつぶらな瞳……ま、眩しいよお。

可愛さに感激していると、クマタロウ君がすり寄ってきた。

クマタロウくんはまだ幼く、大きめの子犬くらいのサイズだ。むくむくした姿にほっこりする。

背中に一筋、白い模様があるのがトレードマークだ。

私がクマタロウくんの頭を撫でると、気持ちよさそうに目をつむる。ああ……癒されるよお……。ちなみに、ネルはクマノさんたちの言葉がわかるみたいで、通訳をしてくれている。

「それじゃあ、今日もお願いします」

私はクマノさんにペコリとお辞儀をした。すると、クマノさんが後ろ脚で立ち上がる。

私とクマノさんは——組み手を始めた。

ネル曰く、一人前の魔法使いになるには、戦闘技術が必要らしい。

まったり読書生活ができれば十分だと思っていたけど……ナーティ様が授けてくれた色々なスキルのおかげで、魔法を覚えるのは楽しい。

魔法に武術が必要なら、それも頑張ってみたいと思った。

こんな前向きな気持ちになるなんて、前世では考えられなかったな……。

そんなわけでネルの提案により、定期的にクマノさんと組み手をしてもらうことになったのだ。

これが中々大変で……手加減はしてくれているんだろうけど、やはり熊……怖いのだ。

二時間ほど組み手をしたところで、ネルがにゃーんと鳴く。

それを合図に、私たちは動きを止め、再びお辞儀をする。

クマノさんたちと出会ってから二ヶ月。初回は一撃でやられていた私も、だいぶまともに相手をしてもらえるようになった。

組み手の後は、クマタロウくんじゃれて遊ぶ。

私がクマタロウくんをわしと撫でていると、ゴロンとお腹を見せて寝転がる。

ずんぐりむっくりでまん丸な姿はとても愛らしくて、頬がゆるむ。

ころころしたお腹を撫でていると、クマタロウくんはご満悦な様子でなすがままになっている。ちよっと手を離すと、寂しそうな顔でこちらを見る。『もう撫でてくれないの？』と言わんばか

りで、キュンキュンしてしまう。ついハイテンションになって、クマタロウくんをもふりまくる。

「ここ？　ここが気持ちいい？　ああ、この毛並み、癖になっちゃうよお」

クマタロウくんとの触れ合いを満喫していると、普段は大人しく私たちのことを見守っているクマノさんが、突然立ち上がった。

「クマノさん？　どうかした？」

「グルルル……」

クマノさんが牙をむき、唸り声をあげる。クマタロウくんもどこか怯えた様子だ。

どうやらクマノさんは、茂みの向こうを威嚇しているみたい。

私はクマタロウくんをクマノさんの側に避難させて、様子を窺ってみることにした。

## 2 初めての魔物

「ネル、ブック」

こんなクマノさんを見るのは初めてだ。もしかして、未知の生物なのかも……。

「茂みに何か潜んでいるみたい。なにかわかる？」

《狼の群れと思いき生態反応があります。中でも、一体だけ異様に能力値の高い個体があります。狼

が魔物化して風属性を得た【ウィンドウルフ】と推測します》

「魔物化!？」

《魔物化とは、動物の心臓が魔石化して起きる現象です。そうすると通常の動物と違った特別な能力を手にし、戦闘能力が高くなり、魔法を行使します。また、もともと群れを作る動物なら、群れを統率して襲ってくることもあります》

魔法だけじゃなく、魔物も存在するなんて……そんなの、私で勝てるの!?

狼二、三匹くらいなら相手にできるようになってきたけど、今回は群れだ。魔物なんて、初めて遭ったし……。

茂みがガサガサと動く。はっと本から顔を上げると、狼たちが走ってきた。

「あーもう！　考える時間くらいちょうだいよ！　第二ライト・バリア！」

私は光属性の魔法でドーム状のバリアを作り、自分とクマノさんたちを囲む。

数匹の狼が飛びかかってきた。吠えたり唸ったりしながら、爪や牙を突き立てる。

だけど、バリアを破ることはできない。

少しだけほっとしていると、暴れる狼たちの後ろから、巨大な影が現れた。

普通の狼たちより身体も爪も大きくて、口からは牙がはみ出している。緑色のたてがみが逆立っていて、見るからに狂暴そうだ。

あれが——ウィンドウルフ。

「グルルル……」

ウインドウルフが唸り、襲ってくる。爪が触れると、バリアが破れた。

「きゃあ!？」

狼たちの攻撃に耐えていたバリアが、風船を割るように簡単に弾けた。

ウインドウルフの爪が、私に振り下ろされ、思わずしゃがむ。

「——!? クマノさん!」

衝撃が来ないので顔を上げる。クマノさんが、私とウインドウルフの間に立ち塞がっていた。

クマノさんは両腕でウインドウルフを押さえつけている。その足元には、ポタポタと血が垂れていた。

私を庇<sup>かば</sup>って怪我をしたんだ……。

「クマノさん! 私はいいからクマタロウくんを連れて逃げて!」

いつもなら言うことを聞いてくれるクマノさんが、私の叫びを無視して戦う。

ウインドウルフの前脚を掴<sup>つか</sup>んで、投げ飛ばした。

どうしよう……クマノさんはクマタロウくと私を守りながら戦っているんだ。

私の使える魔法は第二<sup>ダブル</sup>ランクまで。でも、第二<sup>ダブル</sup>ライト・バリアはあっさり壊された。

これじゃ、打つ手がない。だけどこのままじゃ、クマノさんが……。

不安と恐怖で、ぎゅつと目をつむる。

『——サキ様』

「え、誰!？」

頭の中に、声のようなものが聞こえた。

『ネルです。戦闘中につき、直接思念を飛ばしています。サポートが必要ですか?』

直接——って、そんなことできたの!? でも、今気に留めてる余裕はない!

「ネル、ウインドウルフを倒したい。クマノさんとクマタロウくんを守りたいの、できる!？」

『可能です。【付与魔法<sup>エンチャントマジック</sup>】の行使を提案します』

「エンチャントマジック?」

そういえば、初めに魔法を練習した時に聞いたような……。

『付与魔法<sup>エンチャントマジック</sup>は、魔法にさらに魔法を重ね、様々な効果を……』

「説明はあとで聞くから! やり方を教えて!」

『個体名クマノ、個体名クマタロウを、第二<sup>ダブル</sup>ライト・バリアで囲み、そのバリアにさらに炎<sup>フレア</sup>の魔力を込めます。以前にもお伝えしましたが、魔法発動に必要なのは、魔力・媒体・イメージです。今回の付与魔法<sup>エンチャントマジック</sup>ではバリアの魔法陣を媒体として、さらに炎の魔力を付与します。イメージするものは、サキ様の世界という地雷です』

「じ、地雷!? そんなものイメージしろって言ったって……ああもう! わかった!」

地雷ってことは、つまり触れたら爆発するイメージをすればいいんでしょう!?

投げ飛ばされて倒れていたウインドウルフが身体を起こした。こちらを血走った目で睨むと、すごい勢いで走ってくる。

『では、唱えてください。【二重付与・フレアバリア】』

精一杯集中して、口にする。

【二重付与・フレアバリア！】

第二ライトにより透明なバリアが発動する。それが赤色に変わり、クマノさんたちと私を囲んだ。今までと違う……これが、付与魔法！

飛びかかってきたウインドウルフの爪がフレアバリアに触れる。

バリアの外側で大きな爆発が起きた。

同時にバリアが弾ける。もうもうと煙が立ち込め、ウインドウルフが見えなくなる。

それが晴れると、ウインドウルフはふらふらになっていた。

クマノさんがウインドウルフを爪でなぎ払う。

ウインドウルフはすさまじい悲鳴をあげ、よろめきながら逃げ去ると、他の狼たちもあとに続いて森の中へ走っていった。

クマノさんは安心したのか、その場でぐったりと横になった。

「クマノさん！」

私とクマタロウくんは、慌ててクマノさんへ近づく。見ると、お腹に深い傷を負っている。

「早く治さないと！」

私はクマノさんの傷口に手を向ける。第二で、間に合えばいいけど……。

【第二ヒール……】

私の手から柔らかな光が放たれ、少しずつだけど、クマノさんの傷が治っていく。

時間はかかったものの、そのうちに完全に傷が塞がった。起き上がったクマノさんが、クマタロウくんの顔を舐める。

元氣そうなクマノさんを見て、ほつとする。

「よ、よかったあ……」

『お疲れ様でした。サキ様』

頭の中にネルの声が響いた。振り向くと、本の姿のネルが、ふよふよと浮いている。

そういえば、猫に戻すの忘れてた……。

「うん、ネルもね……。それにしても、話せるなら最初から言つてよ！」

本のページがペラリとめくれ、文字が浮かぶ。

《サキ様が森での読書生活を希望しておられたので、本の姿で会話していました。この【思念伝達】のほうがいいですか？》

そ、そんな理由で……!?

「じゃあ、今度からその魔法で、直接話しかけてね……。ああ……それにしても今日は疲れたわ。」

早く帰りましょう」

私は念のためクマノさんたちを巣穴に送り届けた。それから、自分も洞窟に戻る。

部屋に入ると、どっと疲れが襲ってきた。猫に戻ったネルを抱っこしたまま、ベッドに倒れ込む。頭の中は、今日の戦いのことでいっぱいだった。

バリアに襲いかかってくるウィンドウルフの姿がまだ目に焼き付いている。

あのウィンドウルフ、簡単に私のバリアを破った……。

今回はクマノさんの助けを借りてなんとか追い返せたけど、クマノさんは重傷を負った。それに、私たちを恨んでまた襲ってくるかもしれない。

……このままじゃだめだ。

「ネル、聞いて。明日から、魔法や武術の練習ペースを上げたいの」

『サキ様がそうおっしゃるなら。ですが、なぜですか？』

「もしウィンドウルフが現れたら、クマノさんがまた傷ついちゃう……だから、私が強くなって、クマノさんたちを守りたいの」

『かしこまりました。では現在習得を進めているナンバーズの他、ワーズの習得に着手いたしましょう』

「わ、わーず？」

そういえば、これも最初に魔法を覚える時に言われたような……。

ネルが私の腕の中で解説を始める。

『ワーズとは、ナンバーズに特性を付与する魔法スキルです。非常に高度な技術のため、全てのワーズを使いこなせる者はシャルズにもありません。【魔力操作<sup>まりよくそうさ</sup>】の練習により、サキ様も体得可能です』

ま、魔力操作……？ 聞いたことのない技術が出てきた……。

「例えば、どんなことができるの？」

『ワーズは【ア・ベ・セ・デ】に分類され、四つの意味と特性が存在します。【ア】は飛距離、【ベ】は速度、【セ】は持続性、【デ】は操作性をつかさどります。例えば、第一フレア<sup>シグル</sup>をより遠くへ飛ばしたい時は【ア】のワーズを付与し、【第一・ア・フレア】として発動することで、飛距離が伸びます』

ってことは、より遠くから安全に敵を倒せたりするってことだね！

「なんかすごそう！ さっそく教えてー！」

食いつく私に、ネルが冷静に答える。

『ただし、ワーズは最低でも第三ランク<sup>トリル</sup>のナンバーズを使用できないと、獲得は難しいと考えられています。また、体得するためには魔力操作の練度が必要になります。魔力操作とは、魔力を精密に、かつ自在に操る技術です。身につけるには、イメージ力や精神力を相当鍛錬しなければなりません』

「な、なんか難しそうだね……」

『はい。しかもワーズはナンバーズと異なり、ランクによって威力が固定される性質の魔法ではありません。同じワーズを使っても、術者の力量により性能は大きく異なるのです』

う、ものすごく大変そう……。今まで覚えたナンバーズは低ランクだったし、習得の心得があるからほぼ一瞬でスキル化できていた。だけどワーズはスキル化できたとしても、頑張らなきゃ上手く使いこなせないってことだね……。

私は、今後のことを改めて考える。

だけど、やっぱりこのままじゃダメだ……。

<sup>ダブル</sup>第二ランクのナンバーズまで習得したところで生活に不自由がなくなったから、これで十分だと思ってた。

でも、今日わかった。シャルズで生きていくには力がないといけない。私自身のことも、大切な存在も、自分の力で守らなきゃ。だから、これから頑張っていこう……。

決意する私の隣で、ネルは説明を続ける。

『ワーズを付与すると通常のナンバーズを使うよりも魔力を消費します。また、ナンバーズのランクが上がるごとに使用が困難になっていき……』

ありがとうネル……。でも、魔物のことで疲れたから、眠気に襲われる。もう限界かも……。今日はとりあえず、おやすみ……。

### 3 私の成長

——シャルズに来てから、三年が経とうとしている。

私は……ネルに聞いたところ、これで八歳になったらしい。ちよつとは、背が伸びたかな？

ちなみにネルは魔法の猫だからか、ずっと子猫のままだ。やろうと思えば大きくなれるみたいだけど、可愛いからこのままでいいかなって思ってる。

ウィンドウルフに襲われてから三年——私はネルの指導のもと、ひたすら魔法の修業と研究を重ねた。

「にゃーん」

「うん、ありがとう。もう行くから」

私はネルを抱っこして、洞窟から森へ向かう。

そこには以前と変わらず、クマノさんとクマタロウくんがいる。

クマノさんのお腹には、治癒に時間がかかったせいか傷痕きずあとが残ってしまった……。でも組み手での手ごわさは変わっていないし、とても元気だ。

クマタロウくんも三年で立派になった。最近ではクマノさんとの組み手の後に、クマタロウくん



とも組み手をしている。これが、なかなか強いのだ。

「クマノさん、今日もよろしく願います」

私がいつものように頭を下げると、クマノさんもお辞儀を返す。

私はふうと息をついて、意識を体内の魔力に集中した。

「……いくね」

魔力を足に込め、走る。

私はクマノさんの背後を取っていた。

——魔力とは、単に魔法を発動させるためのエネルギーではない。

三年の研究と練習で、私はそれを知った。

魔力は身体能力の一つであり、魔力を込めるというのは、手を握る時に力を込めるのと同じことなのだ。だから、魔力を込めるとその部分の身体能力が強化される。

足に込めれば、こんな風に瞬時に移動することだってできる。

跳び上がり、クマノさんの頭を後ろから突く。しかし、読まれていたのか、右前脚で防がれる。

地面に着地すると、クマノさんに足払いをかけられる。よけて、距離をとる。

『第二ウィンド』<sup>ダブル</sup>

私は自分の後ろに風を起こして加速し、クマノさんに迫る。クマノさんは、左前脚を振りかざす。

「にゃーん」

ネルの鳴き声で、私とクマノさんはびたつと動きを止めた。

あれ、まだ組み手終了の時間じゃないはずだけど……？

ネルのほうを見ると、深刻な様子で伝えてきた。

『森の先に複数の個体反応があります。狼の群れようですが、普通とは違う大きな反応が出ています』

「ウィンドウルフ……？」

『はい、サキ様のお見込みの通りです』

「懐かしいなあ……」

私は三年前を思い出す。思えばウィンドウルフのおかげで、ここまで強くなれた気がする。

『サポートは必要でしょうか？』

「ううん……大丈夫だよ。いつも通り、私の動きを見てて」

『承知いたしました』

さて——三年前のリベンジだよ。

ネルに教えてもらった場所で、狼たちを待ち構える。すると森から群れが飛び出してきた。すごいスピードで、三匹が飛びかかってくる。

「もうあの時の私じゃないんだよ！」

私は手に魔力を込めて、三匹の顔に掌底しょうていを打ち込む。三匹は一撃で倒れ、動かなくなった。私の戦闘スタイルは、ネルが考案してくれたものだ。ネルは膨大な知識から様々な武術を取り入れ、一番適した戦い方を編み出してくれた。だから私はこの戦い方を【ネル流】と名付けた。

三匹がやられたせいとか、他の狼たちは立ち止まり、警戒した様子でこちらを窺っている。

その一番後ろに控えているのは——ウインドウルフだ。目に映る光景が、三年前と重なる。

あの時は敵かたわなかったけど……今なら戦えるよ！

ウインドウルフが駆け出す。唸りながら口を開き、巨大な牙で私の首元を狙う。

私はよけずに立ち向かう。ウインドウルフに掌底を繰り出す。が、よけられた。

さすが魔物化したウインドウルフ……他の狼たちとは速さが違うみたいだね。

後方に下がったウインドウルフは右前脚を持ち上げた。

すると緑色の風が起き、尖った爪に集まっていく。

きた！ ウインドウルフのオリジナル魔法スキル——【風爪ふうそう】！

この三年間、徹底的に魔法を研究した。ナンバーズ、ワーズ、エンチャント……そして、オリジナル。

オリジナルは魔物や人間が独自に生み出した魔法のことだ。風爪ふうそうは爪つめに風属性の魔法を纏わせて鋭くし、攻撃力を増す効果がある。

ウインドウルフへの対策を練るうちにわかった。三年前、私の第二ダブルライト・バリアを破ったのは、

この風爪だ。

だけど、その対策はしっかりしているよ……。

オリジナル魔法スキルが使えるのは、あなただけじゃない。

【飛脚ひやく】——

飛脚ひやくは、ネルと私が考案したオリジナル魔法スキルだ。風属性の魔法を足に集中し、瞬時に移動する。

ウインドウルフの特性は高い機動性で近づき、強力な爪で近接攻撃を繰り出してくること。だからそれを上回る速度で距離を取る。

【二重付与・エアロバリアダブルエンチャント】

迫ってくるウインドウルフと私の間に、薄緑のバリアが出現する。ウインドウルフが触れた瞬間、風が巻き起こり、身体を吹き飛ばす。

しかし同じ風属性だからか、ウインドウルフは空中で体勢を立て直した。むしろ風を利用して加速し、私に襲いかかる。

でも……作戦通り。

【四重付与・悪魔ノ檻クアルエンチャント あくまのおり】

爪を私に突き刺す寸前で、ウインドウルフは黒いバリアに閉じ込められた。

悪魔ノ檻——四重付与によって、相手を光属性のバリアに捕らえ、さらに炎・土・雷属性の魔

法をバリア内に起こす技だ。

捕まった者は三属性の攻撃を同時に受ける。風属性の魔法しか使えないウィンドウルフは、対応できないはずだ。

攻撃がやみ、バリアが解除される。体のあちこちに傷を負ったウィンドウルフが、息を荒くしてこちらを睨んでいた。

だけど……まだ戦意は失っていないみたい。

ウィンドウルフが憎々しげに吠え、風爪を振りかざして襲ってくる。

「いくよ……」

これが、私の三年間の成果……。

「第四・ベ・フレア！」

べは、魔法のスピードを上げるワーズ。

——この三年で、私はナンバーズを第九、ワーズを全種類使いこなせるまで特訓を重ねた。

超高速の炎の弾を連続して放つ。ウィンドウルフはよけようと動くが、間に合わない。

いくつもの火の玉が、ウィンドウルフを撃ち抜いた。

フレアを受けて、ウルフが倒れる。燃え盛る炎が消えると、焦げた死体が転がっていた。

ボスを倒された狼の群れは、怯えた様子で森の奥へ逃げていく。それを見届けて、私は大きく息をついた。

「……………勝った、勝ったよ!!」

ついに私の力で、魔物を倒せるようになったんだ。これでもう、大切なものを傷つけられることなんてないね。

「勝てたよ、ネル!!」

見守ってくれていたネルを振り向くと、私をねぎらうように頷いてくれた。

『お見事でした。サキ様の完勝でございます』

「……やったあ!」

そのあと、ネルに教えられ、ウィンドウルフの死体を処理して体内の魔石を回収した。魔石を放置すると、影響を受けて新しい魔物が生まれやすくなるらしい。

作業を終えて一息ついていると、クマノさんとクマタロウくんが近寄ってきて、顔を舐めてくれる。

「くすぐりたいよお」

舐められながら二匹の頭に手を置く。今回はクマノさんもクマタロウくんも無事でよかった……。

「ここまで強くなれたのはネルと、クマノさんたちのおかげだね……」

クマノさんは撫でられて気持ちよさそうな顔だ。クマタロウくんも『僕も僕も』と言わんばかりに頭をすり寄せてくる。

「ふふ……これからは私がクマノさんたちを守るからね。さてと……一緒に帰ろう!」

今日はお祝いに、クマノさんたちと美味しいものを食べないかね。  
前世ではやったことないけど……BBQとかしちゃうかな。  
ウキウキしていると、クマノさんが私を背中に乗せてくれた。ネルは私の肩に乗り、クマタロウくんは隣を歩く。

こうして私と三匹は一緒に洞窟に向かったのだった。

## 4 三年ぶりの遭遇

ウィンドウルフを倒して、一週間が経った。今日は森に出て狩りをしている。  
お祝いのBBQで、けっこうお肉を消費したのだ。

クマノさんもクマタロウくんも喜んで食べてくれたので、私もいっぱい食べちゃった。  
ネルに『肉の備蓄が底を突きました』と言われ、慌てて狩猟に出ることにした。

でも狩りといっても武器は使わず、森の動物を雷属性魔法で倒すだけなんだけだね。

「ふう……こんなもんかな」

一時間ほどで、猪二頭、野鳥四羽を捕獲し、解体した。

【収納空間・食糧】

唱えると、何もない空中に丸い穴が現れる。私はそこへお肉をしまっていく。

これも修業中につくったオリジナル魔法スキルだ。空間属性と特殊属性をかけあわせ、自由に物を出し入れできる亜空間を生み出した。空間属性で生み出した収納スペース内は、特殊属性で時間を止めており、しまった肉や野菜は新鮮なまま……贅沢な冷蔵庫つてところだね。

ちなみに食糧の他に【武器】【素材】【アイテム】の収納空間も作ってある。

「よし、これでしばらくは……」

「うわああああああ!!」

私はビクツと身体をすくませた。

な、何……？ 今の悲鳴、人間だよね？ 今までこの森で、人間に会うことはなかったのに。  
久しぶりに聞く人の声が、叫び声だなんて……。何があったんだろう。

同行していたネルが呟く。

『北西の方向ですね』

『場所……わかる？』

『把握しています。向かわれますか？』

「……いちおう、ね」

こうしてネルの案内で、声のしたほうへ向かってみると、そこでは――

「何、あれ……!？」